

幼年期におけるジェンダーの 社会化に関する一考察 静岡県における高校生調査の分析より

An Analysis of Infant Period Gender-Socialization Processes, Based on a Survey of Shizuoka Prefecture High School Students

笹原 恵

静岡大学情報学部

Megumi SASAHARA

Faculty of Informatics, Shizuoka University

< 論文概要 > 本稿は、2006年6月に、静岡県内の高校生618人に対し実施した「幼児期の保育・教育とジェンダーに関する調査」を用い、幼年期になされたジェンダーの社会化について分析・考察を加えたものである。幼児期の遊びや遊び方にみられる男女の相違はこれまでも指摘されてきたが、本論では遊びについての子もたちの実感やまなざしに接近することにより、具体的な男女の関係性の中で、どのようにジェンダーの社会化が進んできているのかを分析した。また小学校入学時に導入される、ランドセルの色に対する子どもたちの記述の分析によって、ランドセルが幼年期の子どもたちに自らのジェンダーを実感させ・体感させる分割ツールとなっていることを明らかにした。幼年期のジェンダーの社会化を考えるにあたって、保育士・幼稚園教諭や小学校教諭、家族(親・祖父母)などからの言葉がけは重要な要因であるが、拙著(笹原1999)に引き続き、両性に向けられた働きかけの質的相違を析出した。

キーワード：ジェンダー，社会化，幼年期，高校生，女らしく・男らしく，遊び，ランドセル

Abstract: This paper examines the process of gender socialization in childhood. It is based on data collected in a survey titled "Child care, infant period education, and an investigation into gender" conducted to the 618 high school students in the Shizuoka prefecture in June, 2006. Though it has been pointed out that gender plays an important role in the way infants play, in this thesis, I attempt to describe additional aspects of gender socialization in early childhood. For example, I have examined how the difference in color for boys' and girls' school book satchels ('randoseru') that children are given when entering elementary school is a symbolic device that encodes these young children with gender socialization. Analysis of differences in words directed at boys and girls from nursery school, kindergarten and elementary school teachers, as well as from family members, etc. are sources of important data for the study of gender socialization. I have extracted qualitative differences in words directed at boys and girls, respectively. This paper is a continuation of a previously published thesis (Sasahara 1999).

1 はじめに - 問題意識 -

「人は女に生まれるのではない、女になるのだ。社会において人間の雌がとっている形態を定めているのは生理的宿命、心理的宿命、経

済的宿命のどれでもない。文明全体が、男と去勢者の中間物、つまり女と呼ばれるものを作りあげるのである。」

(ボーヴォワール1949(2001訳)『第二の性』)。シモーヌ・ド・ボーヴォワールは今を遡ること60年も前に、「私たちが<女になる>のは(生

物学的に) <女に生まれた>からというわけではなく、「文明」が<女と呼ばれるものを作りあげた>からであると喝破している。この「文明」からの働きかけについて、またその働きかけを受ける個人が「自らをつくりあげる過程」について、社会学は「社会化」(socialization)という概念を用い説明を試みてきた。社会化とは、「個人が他者との相互作用のなかで、彼が生活する社会、あるいは将来生活しようとする社会に、適切に参加することが可能となるような価値や知識や技能や行動などを習得する過程」である(『新社会学辞典』)。そしてボーヴォワールがいうところの<女になる>過程、女としての自らをつくりあげる過程こそが、「ジェンダーの社会化」に他ならない。

改めていうまでもなく、ジェンダー gender とは、1960年代の第二派フェミニズムが提起した、性の社会的側面を意味する概念で、「男女両性の生物学的特性の違いを意味するsexに対し、文化的・社会的意味づけされた両性を示す用語」(『新社会学辞典』)であり、「社会的性役割や身体把握など文化によってつくられた性差」(『岩波女性学辞典』)を意味する。

当初はセックス sex とジェンダー gender を区別し、ジェンダーを、生物学的性差であるセックスのうえにつくられる社会的文化的性差であるとする理解もあったが、1980年代後半から展開されてきたポスト構造主義以降は、「身体的差異に意味を付与する知」(J.スコット)という規定にみられるように、むしろ生物学的な基盤論は退けられ、ジェンダーこそが根源的なものとして不平等な社会を編成しているという理解が定着している(竹村和子2002:163-165)。ジェンダーとは、「非対称的な階層秩序」なのであり、『フェミニズム辞典』の著者である、リサ・タトルがジェンダーを「男女を区別するためのことばで、社会的に押しつけられたもの」と定義するのは、ジェンダーが、非対称的な階層的地位を女性(男性)に押しつける役割を果たしているからに他ならない。そして「ジェンダーの社

会化」とは、このような意味において<女をつくりあげる><男をつくりあげる>過程であり、両性のある階層的な位置に追いやり、女性と男性の階層的な秩序を維持する役割を果たすものであるといえるのである。

ボーヴォワールは先に引用した部分に続けて、「他人の介在があってはじめて個人は<他者>になる。子どもは自分に対してだけ存在しているかぎりには、自分を性的に異なるものとしてとらえることはできない。」と書く(ボーヴォワール1949(2001訳):12)。そして『第二の性』の最初の邦訳者である生島遼一は、これを「子供は、他人の眼でじろりとみられることによって、自分がその人にとっての『他者』であることを意識し、そこからまた『自己』を意識する。自己は『他人の眼差しによって凝結させられる』のである」と読み解いている(生島訳同書、文庫版第 巻:265)。クーリーが「鏡に映った自己」(looking-glass self)という概念で示したように、ひとは「他者という鏡に映っている自分の像」をみて、他者が自分をどのように認知し評価しているかを知り、そしてそれによって自らをつくりあげる。子ども(個人)は、「他人の介在」、すなわち「他人」の「眼差し」や「言葉がけ」(声がけ)をはじめとする、有形無形のさまざまな形での働きかけによって、自らを性的な存在ととらえるようになるのであり、私たちはそうやって<女になり><男になる>のである。そしてもっとも早い時期に子どもたちに介在する「他人」とは、養育者・教育者たる親であり、保育士・幼稚園教諭であり、小学校の教員である¹⁾。

本稿は、筆者が2006年6月に、静岡県内の高校生約600人に対して実施した「幼児期の保育・教育とジェンダーに関する調査」の分析を通して、現代の高校生が幼年期にどのような「ジェンダーの社会化」を体験してきたのかを明らかにしようとするものである。すなわち、保育士や教員、親(家族)からの「ジェンダーの社会化」(介在)がどのようなものであったのかを、言葉がけをはじめとする働きかけを分析する中

¹⁾ Faculty of Informatics, Shizuoka University

で明らかにする。

これまでのジェンダーの社会化研究は、主に教育社会学の分野において展開されてきている。特に学校研究としてなされるものが多く、クラスルームリサーチにみられるような児童生徒と教員の相互作用の分析に焦点をあてるものが多くみられる。

たとえば森繁男の幼稚園における実証研究では、幼児と幼稚園教諭、親と幼稚園教諭らの会話分析を通して、教員についての分析を行っており、教員自身が認識していないにもかかわらず、性別カテゴリーの操作的使用が結果として、子どもたちのジェンダーの社会化に資するという所見が得られている(森1985, 森1989)。また宮崎あゆみは小学校の授業観察を通して、「顕在的ステラジー」としての、教員による性別カテゴリーの使用が、結果としてジェンダーの社会化に貢献していることを明らかにしている(宮崎1991)。いずれも教員と子どもたちとの相互作用に着眼しながらも、主にジェンダーの社会化を働きかける側としての教員に着眼した研究になっている。これに対し、木村育恵は、子どもたちがそれをどのように認識しているのかに焦点をあてた研究を展開している(木村育恵2002, 木村育恵2004)。木村は、小学生と教員に対する質問紙調査を実施し、授業中に教員から与えられる発表機会が、学年上昇と共に男子に偏ってくることや、そのことを児童が認識していること(木村育恵2002)、教員自身は気づかぬうちに子どもたちにジェンダー・メッセージを送っているが、子どもたちは低学年のうちからそれを認識している点を明らかにしている(木村育恵2004)。筆者も、新潟市で1993年に行った小学校と中学校の児童生徒・教員調査の分析を通して、「女らしく(女だから)…しなさい」「男らしく(男だから)…しなさい」という声かけが、男子より女子の方が多くなされることや、家族からの働きかけが女子に対して多くなされているのに、教員からの働きかけはむしろ男子に多いこと、教員や家族からの働きかけの男女によ

る差異が、子どもたちにもたらしている抵抗や葛藤の諸相を描き出している(笹原1999, 笹原2003)。

本稿では、高校生の現時点での性別役割分業観をきいたうえで、幼児期から現在(高校生)に至るまでの、ジェンダーに関わる体験を回顧的にきき、それを手がかりに、幼年期のジェンダーの社会化を分析することを目的としている。前述したように、これまでのジェンダーの社会化研究は、クラスルームリサーチにみられるような児童生徒と教員の相互作用の分析に焦点をあてるものが多く、ジェンダーの社会化の重要なアクターである家族や保育園、幼稚園、学校、友人たちとの交流、あるいはメディア接触の中でのジェンダーの社会化を総合的・横断的にとらえることはあまりなかった。むしろ時間と場所を限定したうえでの精緻な分析の重要性を否定するものではないが、やや粗くなるにしても、子どもたちのジェンダーの社会化を家族と学校・社会との関連の中でダイナミックにとらえてみたいというのが筆者の基本的な問題意識である。

高校生調査では、幼児期の通園歴(保育園か幼稚園か)のほか、好きだった遊び(保育園・幼稚園時、小学生)、好きな色(保育園・幼稚園時)、なりたかった職業(保育園・幼稚園時、小学生、中学生、現在)、ランドセルの色、「男らしく」「女らしく」という働きかけ(保育士・幼稚園教諭、小学校教諭、家族)、親の職業、性別役割分業意識など多岐にわたってきいているが、本稿では紙幅が限られていることもあり、好きだった遊びの変遷と購入したランドセルの色、家族(親や祖父母)、保育士・幼稚園教諭、小学校教諭からの「女らしく」「男らしく」という言葉がけなどを中心に、幼年期のジェンダーの社会化過程の素描を試みたい。その際、特に、高校生たちの実感や眼差し、あるいはその記述から読み取ることができる周囲の人々の眼差しを丁寧に拾い上げてみることにする。調査ではいくつかの自由記述欄を設けたが、そこには短いながらも、高校生たちの、実感がこもった経験が綴られて

おり、それがこの作業を可能にした（遊び・おもちゃと性について感じたこと進路・職業と性について感じていることなど）。

「遊び」が、子どもたちの「役割取得」や「役割理解」を表す重要なメディアであることはいうまでもないが、「ランドセルの色」についての分析を行うのは、小学生になるという重要な局面において、何色のランドセルを身につけるのかが、子どもたち自身に自らを「女であること」「男であること」と自覚化させる重要なツールとなっていると筆者が考えるからである（後述）ⁱⁱⁱ。

調査対象者の一人である、高校1年生の女性は、次のように書いている。

「女の子は赤、男の子は黒となって区別され、幼稚園の頃は性別による区別を感じなかったが、ランドセルを持つようになって区別を感じるようになった」

実のところ、子どもたちの衣服や持ち物の色は、乳児の頃から分けられがちであり、女の子の周りはピンクや赤、男の子の周りには水色や青などの色があふれている。その延長線上にあるものとはいえ、自身にも、あるいは周囲にも目に見える形で両性の差異が顕著に示されるランドセル（の色）は、実はジェンダーの分化を促す重要な役割を果たしているのではないだろうか。

2 調査の概要

本稿で分析した「幼児期の保育・教育とジェンダーに関する調査」は、2006年6～7月にかけて、静岡県内の12高校、延べ618人に対して行ったものである。調査にあたっては、静岡県高等学校教育研究会家庭科部会の方々に全面的なご協力をいただいた。

2.1 調査の概要・調査設計^{iv}

【調査方法】質問紙法（調査票配付による集団記入法調査）

【調査対象者】静岡県内の高校生618人

【抽出】層化二段無作為抽出法

静岡県内にある135高等学校のうち、東部、中部、西部の三地区のそれぞれから公立普通高校、私立普通高校、職業高校をそれぞれの割合にあうように抽出し、調査協力を依頼した。全部で18校を抽出したが、依頼が困難であった1校を除き、17校に配付した。

校内においては、家庭科教員に1クラス（概ね40人程度を想定）を抽出して調査票を配付してもらい、記入済の調査票をまとめて返送してもらった。基本的には1年生にと依頼したが、クラス編成や授業の関係上、どの1クラスを抽出するかは最終的には依頼した家庭科教員に委ねた。
<東部>公立普通高校が30、私立普通高校が6、職業高校7のうち、公立普通高校4、私立普通高校1、職業高校1を抽出。

<中部>公立普通高校21、私立普通高校13、職業高校9のうち、公立普通高校3、私立普通高校2、職業高校1を抽出。

<西部>公立普通高校29、私立普通高校7、職業高校7のうち、公立普通高校4、私立普通高校1、職業高校1を抽出。

【回収率】調査を依頼した17校のうち、実際に回収ができたのは12校（東部4校、中部5校、西部3校）、計618票であった。1クラスのサイズを概ね40人程度と想定していたので、調査票配付数を各校約50枚、計850票あまりと考えた場合、回収率は約70%である。

（付記：回収率の高さはひとえに今回の調査に協力くださった静岡県高等学校教育研究会家庭科部会の会員の皆様のおかげであり、心から御礼申し上げたい）

【調査時期】2006年6～7月

調査の名称：「幼児期の保育・教育とジェンダーに関する調査」

【調査項目】調査対象者の性別、幼児期の通園歴（保育園か幼稚園か）、好きな遊び（保育園・幼稚園時、小学生）、遊び・おもちゃと性について感じたこと、好きな色（保育園・幼稚園時）、なりたい職業（保育園・幼稚園時、小学生、中学

生,現在),進路・職業と性について感じていること,ランドセルの色,「男らしく」「女らしく」という働きかけ(保育士・幼稚園教諭,小学校教諭,家族),どのように感じたか,親の職業,性別役割分業意識.

2.2 調査対象者の属性

調査対象者は静岡県内の12の高校(東部(東部4校,中部5校,西部3校)に通う,618人の高校生で,学年でみると1年生が68.3%ともっとも多く,次いで3年生(17.8%),2年生(13.6%)となっていた.また性別では女性が50.8%,男性が48.1%と女性がやや多いものの,概ね女性と男性が半々となっている(回答者は,女性314人,男性297人,性別について無回答7人であった.本論文の表では基本的に無回答の回答は省略している).きょうだい数をみると,一人っ子は6.8%と少なく,いずれかのきょうだいがいる人が9割以上,姉妹がいる人は57.4%,兄弟がいる人は56.6%であった.親が共働きという人は67.3%であり,どちらかのみが働いている(21.2%)を大きく上回っていた.また単親であると答えた人は5.5%であった.

3 幼児期のジェンダー体験

ジェンダーの社会化は,実は幼児期にすでに始まっている.端的にいえば,この世に生まれおちた瞬間から,子どもたちへの周囲からの働きかけが始まっているといっても過言ではない.

たとえば名前一つとってみても,女の子の名前と男の子の名前は実に非対照的である.ベネッセコーポレーションが実施した調査によると,2007年1月から11月までに生まれた子ども約4万人の名前のうち,女の子の名前のベスト10は,陽菜 ひな,葵 あおい,さくら,結衣 ゆい,結菜 ゆいな,美羽 みう,凜 りん,美優 みゆ,優奈 ゆうな,優衣 ゆい,美咲 みさき,七海 ななみ である(あさひコム2007年12月

13日付ニュースより:<http://www.asahi.com/life/update/1213/TKY200712130173.html>).明治生命が毎年実施している子どもの名前調査でも同様の傾向がみられるが,女の子の名前は,美しく,優しく,優雅になってほしいという親の思いや,美しいものの代表格ともいえる花の名前(葵,桜),あるいは花の動きになぞらえた「咲く」「萌える」「結ぶ」などが多く盛り込まれている.これに対し,男の子の名前のベスト10は,大翔 ひろと,悠斗 ゆうと,颯太 そうた,翔太 しょうた,蓮 れん,悠人 ゆうと,優斗 ゆうと(6),悠太 ゆうた,大輝 だいき,陸 りく,大和 やまと となっている.大きく,太く(丈夫に),飛翔してほしい,輝いてほしいという親の思いがうかがえる.親たちの思いが込められた名前にも深くジェンダーが刻まれていることは実に象徴的である.

3.1 幼児期に好きだった遊び

保育園・幼稚園の時に好きだった遊びとして多かったのは,女性では「ごっこ遊び」(ままごとを含む,52.5%)が多く,中でも「ままごと」(36.3%)が多かった(表1~表6).次いで,「砂遊び」(29.0%),「お絵描き・ぬりえ」(22.9%),「遊具遊び」(ぶらんこやすべり台,ジャングルジム)14.0%),「鬼ごっこ」(14.3%)の順になっていた.他方,男性では「鬼ごっこ」(18.9%),「砂遊び」(17.5%),「積み木・ブロック」(10.8%),「サッカー」(10.4%),「遊具遊び」(9.8%),「ごっこ遊び」(8.1%)となっていた.

特に「ままごと」と「サッカー」は男女差が大きく,「ままごと」を好きだったと答えた人は女性36.3%に対し男性では1.7%,「サッカー」が好きだったと答えたのは女性では0.6%,男性では10.4%と大きな差がみられた(いずれも1%水準で有意).筆者が保育園で調査をした時,子どもたちが「ままごと」のことを「お母さんごっこ」「家族ごっこ」と呼んでいるのをきいたが^{vi},「ままごと」はむろん家事と親近性が高く,家族

関係についてのロールプレイングを含む遊びである。他方、特に静岡県はサッカー王国といわれるだけあり、サッカーは子どもたちに人気のスポーツである。県内に2つのプロサッカーチームがあり、幼児向けに「サッカー教室」を開くなど、「少年」サッカーが盛んな土地がただけあって、男性の実に10人に1人が「サッカー」が好きだと答えている。

この他、男女で有意な差がみられたものとしては、「ブロック遊び」、「車・電車遊び」、「かけっこ」(男性に多かったもの)、「人形・ぬいぐるみ遊び」、「お絵描き・ぬりえ」、「一輪車」、「プール・水泳」、「なわとび」(女性に多かったもの)などがあつた。

「ごっこ遊び」の中で、女性に顕著であったのは「セーラームーンごっこ」が好きだったという人が8.9%と多かったことである(1%有意)。これに対し、男性は「レンジャーごっこ」や「ヒーローごっこ」、「ウルトラマンごっこ」などが挙げられているが、すべてあわせても4%と女性の「セーラームーンごっこ」に比べると少なかった。

「セーラームーン」とは、テレビアニメ『美少女戦士セーラームーン』のことで、1992年3月から1996年3月まで、5シリーズ、実に166回に渡って、テレビ朝日系で放映された人気アニメである。木村涼子が指摘するように、「美少女戦士セーラームーン」は、それまで、「紅一点」として戦う男性キャラクターを支え、男性の意欲を引き出すマドンナ的存在であった女性(一人)という設定を劇的に転換したもので、それまでの「紅一点」は話が進むにつれてその存在が希薄になりがちであったのに対し、「女性戦士集団を率いる新しいヒロイン像」が示されたという意味で画期的な番組であった(木村2003)。

調査時点が2006年6～7月であり、調査対象者は高校1年生から3年生(概ね16～18歳)であるので、対象者らは、放映開始時には2～4歳、終了時には6～8歳であったと考えられる。現在の大学生も「セーラームーン」世代であるが、調査対象者の女性の約10人に1人が、テレビでみたセーラームーンに倣い、集団を組んでたたかうドラマに取り組んでいたことがわかる。セーラームーンはそれまでの「紅一点」と反対

表1 好きな遊び(1)ごっこ遊び1(保育園・幼稚園の時)

	計	女性	男性	
セーラームーンごっこ	29 (4.7%)	28 (8.9%)	1 (0.3%)	**
～ごっこ	22 (3.6%)	13 (4.1%)	8 (2.7%)	
ヒーローごっこ	8 (1.3%)	2 (0.6%)	6 (2.0%)	
～レンジャーごっこ・戦隊ごっこ	7 (1.1%)	2 (0.6%)	4 (1.3%)	
ウルトラマンごっこ	2 (0.3%)	0 (0.0%)	2 (0.7%)	
ヒロインごっこ	1 (0.2%)	1 (0.3%)	0 (0.0%)	
お姫さまごっこ	1 (0.2%)	1 (0.3%)	0 (0.0%)	
当時好きだったアニメのなりきりごっこ	1 (0.2%)	0 (0.0%)	1 (0.3%)	
おみせやさんごっこ	1 (0.2%)	1 (0.3%)	0 (0.0%)	
動物ごっこ	1 (0.2%)	1 (0.3%)	0 (0.0%)	
エレベータごっこ	1 (0.2%)	1 (0.3%)	0 (0.0%)	
電車ごっこ	1 (0.2%)	1 (0.3%)	0 (0.0%)	
忍者ごっこ	1 (0.2%)	0 (0.0%)	1 (0.3%)	
マリオごっこ	1 (0.2%)	0 (0.0%)	1 (0.3%)	
ままごと(お母さんごっこ2を含む)	119 (19.3%)	114 (36.3%)	5 (1.7%)	**
ごっこ遊び計	196 (31.7%)	165 (52.5%)	29 (9.8%)	**

注 回答者は、女性314人、男性297人、性別についての無回答者は7人であった。表中では無回答は省略している。以下の表でも同じ。

**1%水準で有意,*5%水準で有意

表2 好きな遊び(2) 室内での遊び(保育園・幼稚園の時)

	計	女性	男性	
積み木遊び	21 (3.4%)	11 (3.5%)	10 (3.4%)	
ブロック遊び	30 (4.9%)	8 (2.5%)	22 (7.4%)	**
(うちレゴブロック4)	4 (0.6%)	1 (0.3%)	3 (1.0%)	
積み木・ブロック計(再掲)	51 (8.3%)	19 (6.1%)	32 (10.8%)	
ミニカー	5 (0.8%)	1 (0.3%)	4 (1.3%)	
プラレール	3 (0.5%)	0 (0.0%)	3 (1.0%)	
トーマスの走るもの	1 (0.2%)	0 (0.0%)	1 (0.3%)	
車・電車遊び計(再掲)	9 (1.5%)	1 (0.3%)	8 (2.7%)	*
人形遊び	22 (3.6%)	22 (7.0%)	0 (0.0%)	**
りかちゃん人形遊び	3 (0.5%)	3 (1.0%)	0 (0.0%)	
ぬいぐるみ	1 (0.2%)	1 (0.3%)	0 (0.0%)	
人形・ぬいぐるみ遊び(再掲)	26 (4.2%)	26 (8.3%)	0 (0.0%)	**
お絵描き	50 (8.1%)	45 (14.3%)	5 (1.7%)	**
ぬりえ	2 (0.3%)	1 (0.3%)	1 (0.3%)	
お絵描き・ぬりえ計(再掲)	78 (12.6%)	72 (22.9%)	6 (2.0%)	**
折り紙	7 (1.1%)	2 (0.6%)	5 (1.7%)	
紙飛行機	2 (0.3%)	0 (0.0%)	2 (0.7%)	
工作 ¹	2 (0.3%)	0 (0.0%)	2 (0.7%)	
粘土遊び	12 (1.9%)	7 (2.2%)	5 (1.7%)	
おもちゃ遊び	3 (0.5%)	1 (0.3%)	2 (0.7%)	
あやとり	1 (0.2%)	1 (0.3%)	0 (0.0%)	
けん玉	1 (0.2%)	1 (0.3%)	0 (0.0%)	
こま	6 (1.0%)	2 (0.6%)	4 (1.3%)	
絵本を読むこと	3 (0.5%)	3 (1.0%)	0 (0.0%)	
読書	3 (0.5%)	2 (0.6%)	1 (0.3%)	
流行のマンガ	1 (0.2%)	1 (0.3%)	0 (0.0%)	
ピアノ	3 (0.5%)	3 (1.0%)	0 (0.0%)	
その他	9 (1.5%)	5 (1.6%)	4 (1.3%)	

1 工作には、空き箱工作、玩具づくりを含む

**1%水準で有意, *5%水準で有意

表3 好きな遊び(3) ゲーム(保育園・幼稚園の時)

	計	女性	男性
TVゲーム・ファミコン	6 (1.0%)	1 (0.3%)	5 (1.7%)
カードゲーム	1 (0.2%)	0 (0.0%)	1 (0.3%)
ゲーム	7 (1.1%)	1 (0.3%)	6 (2.0%)
パズル	6 (1.0%)	1 (0.3%)	5 (1.7%)
すごろく	2 (0.3%)	0 (0.0%)	2 (0.7%)
かるた	1 (0.2%)	1 (0.3%)	0 (0.0%)
トランプ	1 (0.2%)	0 (0.0%)	1 (0.3%)
いす取りゲーム	1 (0.2%)	1 (0.3%)	0 (0.0%)
ハンカチ落とし	1 (0.2%)	0 (0.0%)	1 (0.3%)

**1%水準で有意, *5%水準で有意

に「黒一点」、すなわち男性が一人だけ登場するが、調査対象者の男性の一人は、自らがセーラムーンごっこに駆り出された経験を「何か強引に女子の演劇?(セーラムーンだったような)みたいなものに参加させられたのを強烈に覚えている」と書いている。黒一点のタキシード仮面と同様に、彼もまた黒一点で遊んだのであろうか。

保育園・幼稚園時に好きだった遊びと、小学校の時に好きだった遊びを比べると、傾向はあまり変わらないものの、男性では、室内での遊びがあまり挙げられていないにもかかわらず、

ゲーム(テレビゲームなどを含む)、特にカードゲームが上位にあがってきている(表7~9)。これに対し、比率は低くなっているものの、女性では幼児期(保育園・幼稚園の時)に好まれていた遊びが継続して挙げられており、「お絵描き」「人形遊び・ぬいぐるみ遊び」など男性と有意な差がみられた。また屋外での遊びでは、男女とも球技、特にドッジボールは20%以上の子どもが好きな遊びとして挙げていた。また男女の有意な差がみられるものとしては、男性では「サッカー」(23.2%)、「野球」(9.1%)が多く、女性では「鬼ごっこ」(30.6%)、「なわとび・大縄

表4 好きな遊び(4) 屋外1(保育園・幼稚園の時)

	計	女性	男性	
三輪車	3 (0.5%)	1 (0.3%)	2 (0.7%)	
自転車	4 (0.6%)	1 (0.3%)	3 (1.0%)	
スクーター	2 (0.3%)	2 (0.6%)	0 (0.0%)	
一輪車	8 (1.3%)	8 (2.5%)	0 (0.0%)	**
乗り物計(再掲)	17 (2.8%)	12 (3.8%)	5 (1.7%)	
おいかけっこ	2 (0.3%)	2 (0.6%)	0 (0.0%)	
鬼ごっこ	106 (17.2%)	45 (14.3%)	56 (18.9%)	
(うち高おに1, 色おに2, 氷おに2, ケイドロ2)				
かくれんぼ	37 (6.0%)	16 (5.1%)	21 (7.1%)	
かけっこ	6 (1.0%)	0 (0.0%)	6 (2.0%)	*
体を動かす遊び	1 (0.2%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	
缶けり	4 (0.6%)	1 (0.3%)	3 (1.0%)	
木登り	5 (0.8%)	3 (1.0%)	2 (0.7%)	
くつなげ	1 (0.2%)	1 (0.3%)	0 (0.0%)	
グリコ	2 (0.3%)	1 (0.3%)	0 (0.0%)	
ぐるぐるまわし	1 (0.2%)	1 (0.3%)	0 (0.0%)	
しっぽとり	2 (0.3%)	2 (0.6%)	0 (0.0%)	
サバイバルゲーム	2 (0.3%)	0 (0.0%)	1 (0.3%)	
はないちもんめ	4 (0.6%)	3 (1.0%)	1 (0.3%)	
だるまさんが転んだ	2 (0.3%)	1 (0.3%)	1 (0.3%)	
雪合戦	1 (0.2%)	1 (0.3%)	0 (0.0%)	
コロ付き箱の引き回し 1	2 (0.3%)	0 (0.0%)	2 (0.7%)	
砂あそび・砂場遊び	97 (15.7%)	59 (18.8%)	38 (12.8%)	*
泥遊び・どろんこ遊び	29 (4.7%)	19 (6.1%)	9 (3.0%)	
おだんご作り	19 (3.1%)	13 (4.1%)	5 (1.7%)	
砂遊び計(再掲)	145 (23.5%)	91 (29.0%)	52 (17.5%)	**
色水づくり	2 (0.3%)	2 (0.6%)	0 (0.0%)	
しゃぼん玉	1 (0.2%)	1 (0.3%)	0 (0.0%)	

1 コロのついたもので遊ぶ1, コロ付の箱を改造し、屋台や車に見立ててみんなで引き回す1.

**1%水準で有意, *5%水準で有意

表 5 好きな遊び(5) 屋外2(保育園・幼稚園の時)

	計	女性	男性
公園で遊ぶ	4 (0.6%)	2 (0.6%)	2 (0.7%)
遊具遊び	18 (2.9%)	9 (2.9%)	9 (3.0%)
ブランコ	32 (5.2%)	18 (5.7%)	14 (4.7%)
すべり台	10 (1.6%)	7 (2.2%)	3 (1.0%)
ジャングルジム	4 (0.6%)	2 (0.6%)	2 (0.7%)
シーソー	1 (0.2%)	1 (0.3%)	0 (0.0%)
うんてい遊び	3 (0.5%)	3 (1.0%)	0 (0.0%)
鉄棒	5 (0.8%)	4 (1.3%)	1 (0.3%)
遊具計(再掲)	73 (11.8%)	44 (14.0%)	29 (9.8%)
アスレチック	1 (0.2%)	1 (0.3%)	0 (0.0%)
外で遊ぶこと	6 (1.0%)	4 (1.3%)	2 (0.7%)
走ること・走り回ること	4 (0.6%)	3 (1.0%)	1 (0.3%)
竹馬	6 (1.0%)	4 (1.3%)	2 (0.7%)
なわとび	15 (2.4%)	12 (3.8%)	3 (1.0%)
ホッピング(ピョンピョン跳ねるもの)	1 (0.2%)	0 (0.0%)	1 (0.3%)
ボール遊び	3 (0.5%)	1 (0.3%)	2 (0.7%)
トランポリン	1 (0.2%)	0 (0.0%)	1 (0.3%)
ちゃんばら	3 (0.5%)	1 (0.3%)	2 (0.7%)
探検	1 (0.2%)	1 (0.3%)	0 (0.0%)
昆虫採取・虫とり	2 (0.3%)	0 (0.0%)	2 (0.7%)
アリの解体	1 (0.2%)	1 (0.3%)	0 (0.0%)

**1% 水準で有意, *5% 水準で有意

表 6 好きな遊び(6) スポーツ(保育園・幼稚園の時)

	計	女性	男性
サッカー	33 (5.3%)	2 (0.6%)	31 (10.4%)
ドッチボール	16 (2.6%)	5 (1.6%)	11 (3.7%)
野球	4 (0.6%)	2 (0.6%)	2 (0.7%)
すもう	3 (0.5%)	0 (0.0%)	2 (0.7%)
ティーボール	1 (0.2%)	0 (0.0%)	1 (0.3%)
プール・水泳	5 (0.8%)	5 (1.6%)	0 (0.0%)
水遊び	5 (0.8%)	2 (0.6%)	3 (1.0%)
山登り・山遊び	2 (0.3%)	2 (0.6%)	0 (0.0%)

**1% 水準で有意, *5% 水準で有意

表7 小学生の時、好きだった遊び(1)室内遊び(上位のみ)

	計	女性	男性	
お絵描き	27 (4.4%)	25 (8.0%)	1 (0.3%)	**
人形遊び・ぬいぐるみ計	19 (3.1%)	19 (6.1%)	0 (0.0%)	**
人形遊び	14 (2.3%)	14 (4.5%)	0 (0.0%)	**
ごっこ遊び計	11 (1.8%)	6 (1.9%)	5 (1.7%)	
読書	9 (1.5%)	6 (1.9%)	3 (1.0%)	
友達と・・・	9 (1.5%)	8 (2.5%)	1 (0.3%)	*
パズル	6 (1.0%)	4 (1.3%)	2 (0.7%)	
折り紙	5 (0.8%)	4 (1.3%)	1 (0.3%)	
シルバニアファミリー・ぬいぐるみ	5 (0.8%)	5 (1.6%)	0 (0.0%)	*
乗り物遊び計	4 (0.6%)	1 (0.3%)	3 (1.0%)	
ごっこ遊び	4 (0.6%)	2 (0.6%)	2 (0.7%)	

**1%水準で有意, *5%水準で有意

表8 小学生の時、好きだった遊び(2)外遊び

	計	女性	男性	
球技(再計)	275 (44.5%)	97 (30.9%)	177 (59.6%)	**
ドッジボール	142 (23.0%)	74 (23.6%)	68 (22.9%)	
サッカー	82 (13.3%)	12 (3.8%)	69 (23.2%)	**
ケイドロ・ドロケイ	48 (7.8%)	31 (9.9%)	17 (5.7%)	
なわとび・大縄	40 (6.5%)	36 (11.5%)	3 (1.0%)	**
かくれんぼ	27 (4.4%)	21 (6.7%)	6 (2.0%)	**
野球	27 (4.4%)	0 (0.0%)	27 (9.1%)	**
ブランコ	26 (4.2%)	22 (7.0%)	4 (1.3%)	**
一輪車	26 (4.2%)	25 (8.0%)	1 (0.3%)	**
缶けり/ボコベン	18 (2.9%)	8 (2.5%)	10 (3.4%)	
バスケットボール	17 (2.8%)	8 (2.5%)	9 (3.0%)	
外遊び	15 (2.4%)	14 (4.5%)	1 (0.3%)	**
遊具	14 (2.3%)	12 (3.8%)	2 (0.7%)	**
キックベース/フットベースなど	13 (2.1%)	8 (2.5%)	5 (1.7%)	
鉄棒	10 (1.6%)	7 (2.2%)	3 (1.0%)	
ボール遊び	9 (1.5%)	4 (1.3%)	5 (1.7%)	
スポーツ	8 (1.3%)	0 (0.0%)	8 (2.7%)	**
探検	7 (1.1%)	5 (1.6%)	2 (0.7%)	
木登り	5 (0.8%)	5 (1.6%)	0 (0.0%)	*
ジャングルジム	5 (0.8%)	4 (1.3%)	1 (0.3%)	
球技	5 (0.8%)	3 (1.0%)	2 (0.7%)	
走り回る	4 (0.6%)	2 (0.6%)	2 (0.7%)	
砂遊び	4 (0.6%)	2 (0.6%)	1 (0.3%)	
土・泥遊び	4 (0.6%)	2 (0.6%)	2 (0.7%)	
鬼ごっこ	4 (0.6%)	96 (30.6%)	56 (18.9%)	**
竹馬	4 (0.6%)	2 (0.6%)	2 (0.7%)	
アスレチック	4 (0.6%)	4 (1.3%)	0 (0.0%)	*
自転車	4 (0.6%)	2 (0.6%)	2 (0.7%)	
秘密基地	4 (0.6%)	4 (1.3%)	0 (0.0%)	*
公園で遊ぶ	3 (0.5%)	3 (1.0%)	0 (0.0%)	

**1%水準で有意, *5%水準で有意

(11.5%),「一輪車」(8.0%),「かくれんぼ」(6.7%),「ぶらんこ」(6.7%)などが多かった。また数は少ないものの「外遊び」(4.5%),「遊具」(3.8%),「木登り」(1.6%)なども女性に多く、男女の有意差がみられた。

幼児期(保育園・幼稚園)から小学校にかけて、好きな遊びがどのように変遷しているのかをみると、幼児期には男女とも人気が高かった「ごっこ遊び」や「砂遊び」が影をひそめている(「ごっこ遊び」は女性では52.5% 0.6%,男性では8.1% 0.7%。「砂遊び」は女性では29.0% 1.3%,男性では17.5% 1.0%)。しかし比率は低くなっているものの、女性では「お絵描き・ぬりえ」や「遊具遊び」(特に「ブランコ」)、「鬼

ごっこ」などの人気が継続する一方で、「なわとび・大縄」や「一輪車」などの人気が高くなっている。一方、男性の方では、幼児期に人気があった「サッカー」の人気がさらに高くなり(10.4% 23.2%),また「野球」(9.1%)も10人に1人が挙げるようになっている。全体的には特定の遊びに集中するというよりは多様な遊びに拡散する状況がみられる中、「サッカー」が好きという男性の比率が急増する様子がみられる。男性のスポーツへの志向が強まっていることが読み取れる。

3.2 自分の性別と遊びについて感じたこと

保育園・幼稚園の時に好きだった遊びと小学生

表9 小学生の時、好きだった遊び(3)ゲーム

	計	女性	男性	
TVゲーム	29 (4.7%)	10 (3.2%)	19 (6.4%)	
スーパーファミコン他	3 (0.5%)	2 (0.6%)	1 (0.3%)	
カードゲーム	18 (2.9%)	0 (0.0%)	18 (6.1%)	**
ポケモンごっこ	3 (0.5%)	1 (0.3%)	2 (0.7%)	
ゲーム	42 (6.8%)	17 (5.4%)	25 (8.4%)	
ゲーム計	95 (15.4%)	30 (9.6%)	65 (21.9%)	**

**1%水準で有意,*5%水準で有意

表10 性と遊びについて感じたこと

	計	女性	男性	
1 女の子らしい遊び・遊び方をした他	8 (1.3%)	8 (2.5%)	0 (0.0%)	**
2 男の子らしい遊び・遊び方をした他	5 (0.8%)	0 (0.0%)	5 (1.7%)	*
3 男女問わず	12 (1.9%)	7 (2.2%)	5 (1.7%)	**
4 男女分かれていた	5 (0.8%)	2 (0.6%)	3 (1.0%)	
5 異性と遊んでいた	5 (0.8%)	4 (1.3%)	1 (0.3%)	*
6 同性と遊んでいた	3 (0.5%)	2 (0.6%)	1 (0.3%)	
7 自分の性のための遊びはいや	4 (0.6%)	4 (1.3%)	0 (0.0%)	*
8 その他	10 (1.6%)	3 (1.0%)	7 (2.4%)	**
9 性による遊びの限定があった	6 (1.0%)	4 (1.3%)	2 (0.7%)	*
計	57 (9.2%)	33 (10.5%)	24 (8.1%)	**

**1%水準で有意,*5%水準で有意

の時に好きだった遊びをきいたうえで、自身の性別と遊びについて感じたことを自由記述で書いてもらったところ、618人のうち57人、全体の9.1%が何らかの記述をしていた(表10)。これらを読んでいくと、性別と遊びに関する風景が浮かび上がってくる。まずは具体的な内容を見ておくことにしたい。

自由記述の中で、男女関係なく遊んでいたことを含む記述がみられる(括弧内は回答者の性別)。

「保育園や幼稚園の時は、男女問わず遊んでいた」(女性)

「保育園の時は性別とか関係なく遊んでいた」(女性)

「女子もまじってサッカーをやったりしていたので特になかった」(男性)

「男女関係なく、おままごとともサッカーとかも平気で遊んでいた」(男性)

「男子も女子も含めておままごとの的なものをやったことも何度かある」(男性)

異性と遊んでいたと書いたことを含む記述には次のようなものがある。

「昔は、子供だったので、女の子とも遊んでいた」(男性)

「幼稚園のときは、よく男の子と遊んでいた」(女性)

一方で異性と遊ぶ理由があったと書く人もあった。すなわち、自分が住んでいた地域の子どもたちの構成やきょうだいの影響があり、異性と遊んでいたというのである。

「兄の影響で男の子と遊んでいたため、ままごとなどはしたことがない」(女性)

「団地に住んでた時同じ年の女の子があんまりいなくてお兄ちゃんと(その友達)と遊んでいたんだけど、男の子はオニごっことか早いからいつもあめんぼでつまんなかった」(女性)。

男女で遊びが分かれていたことを含む記述も見られる。

「男子は男子と女子は女子とに分かれていたから、性別の違いは何か感じるものはあったと

思います。」(男性)

「男子と女子では遊びに何らかの大きな違いを感じる」(男性)

その中に、「男の子がサッカーとか野球とかやっていたいなーって思った」という記述がみられる。男女とも一緒にサッカーをした人がいる一方で、入りにくい(入りたいと思っても入れない)雰囲気があったのであろう。

性によって遊びが限定されていると感じていたことを含む記述もみられる。

「木のぼりとか、森に入ることはだめって言われていた。男の子とも遊んだなあ」(女性)

「この性別だからあんまりやったことがないあそびがあるかもしれない(野球とか)」(女性)

「女の子は、泥まみれになって遊んではいけないのかなと思った(小さい頃)」(女性)

冒険や男性がやりがちなスポーツ、泥まみれの遊びなどは女性がすべきことではないと認識していたと彼女たちは書いている。

「女の子の遊びはこれ、という両親の思想に多少影響されていた」(女性)と親からの影響を指摘した人もいた。

他方、男性は「男ゆえにおままごとはやらなんだあ」「サッカーは男のやる事だと思った」と書いている。

この他にも、女の子(男の子)らしい遊びや遊び方をしたという答えがみられる。女性では、「女の子は家の中で遊ぶ傾向が強い」、「女 セーラームーンの服を着てセーラームーンごっこをすること」、「女の子はすわりんこであそぶコトが多い」、「やっぱりおままごととかをたくさんしていた」、「お化粧するのが好きだった」という記述、男性では「男は格闘ゲーム大好き」、「男の子は外で遊ぶのが一番」という記述などである。

これらを総合すると、幼児期には男女で一緒にままごとやサッカーなどをした経験がある一方で、すでに男性と女性の分離がみられることがわかる。そして子どもたちのまなざしからこの「分離」を眺めると、男性の集まりを「外か

ら」女性が眺めるという色合いが強く、逆のまなざしはあまり見られない。つまり、男の子たちがサッカーや野球に興じている時に、うらやましそうにそれを眺める女性の姿は「男の子がサッカーとか野球とかやっていていいなって思った」、「野球がやってみたかったけど、まわりにやってくれる人がいなかった」、「いとも全員男で兄しかいなかったから、親戚で遊ぶ時、いつも仲間外れだった」というようにクローズアップされてくるのであるが、逆はみられない。

また女の子の遊びは好きではなかったという記述もみられるが「女の子らしい遊びはあまり好きではなかった」、「女だけど、人形ごっこみたいなのは好きではなかった」、「自分は、女の子の遊びの"ままごと"などが好きではなかつ

た」)、これはすべて女性によるもので、男性の「男の子の遊びは好きではない」という記述はみられなかった。女性の方が自身の性の受容度が低く、「引き裂かれる」傾向があるが、おそらくこの「女らしい遊び」への「嫌悪」は自身の性の受容と関連があるものと考えられる^{viii}。

3.3 ほしかったおもちゃ・やりたかった遊び

子どもの頃(保育園や幼稚園の時)、ほしかったのに買ってもらえなかったおもちゃや、やりたかったのにできなかった遊びなどについて尋ねたところ、好きだった遊びと同様の傾向が見出された(表11)。すなわち、男性はテレビゲームやラジコンなどが欲しかったと答えていたの

表 11 ほしかったおもちゃ(保育園・幼稚園の時)

	計	女性	男性	
TVゲームなど	46 (7.4%)	13 (4.1%)	33 (11.1%)	**
キャラクターもの	12 (1.9%)	3 (1.0%)	9 (3.0%)	
りかちゃん人形・関連	11 (1.8%)	11 (3.5%)	0 (0.0%)	**
ままごとなど	10 (1.6%)	7 (2.2%)	3 (1.0%)	
スポーツ関連	9 (1.5%)	5 (1.6%)	4 (1.3%)	
戦隊もの	8 (1.3%)	2 (0.6%)	6 (2.0%)	
人形	7 (1.1%)	6 (1.9%)	1 (0.3%)	
セーラームーン関連	7 (1.1%)	7 (2.2%)	0 (0.0%)	**
ラジコン	6 (1.0%)	0 (0.0%)	6 (2.0%)	**
ぬいぐるみ	5 (0.8%)	4 (1.3%)	1 (0.3%)	
ドレスなど変身グッズ	5 (0.8%)	5 (1.6%)	0 (0.0%)	*
ジャングルジムなど室内遊具	5 (0.8%)	5 (1.6%)	0 (0.0%)	*
囲碁将棋などのゲーム	4 (0.6%)	1 (0.3%)	3 (1.0%)	
武器のおもちゃ	4 (0.6%)	1 (0.3%)	3 (1.0%)	
カードゲーム	3 (0.5%)	2 (0.6%)	1 (0.3%)	
シルバニアファミリー	3 (0.5%)	3 (1.0%)	0 (0.0%)	
車	3 (0.5%)	0 (0.0%)	3 (1.0%)	
自転車	3 (0.5%)	1 (0.3%)	2 (0.7%)	
動物(ペット)	3 (0.5%)	3 (1.0%)	0 (0.0%)	
たまごっち	2 (0.3%)	1 (0.3%)	1 (0.3%)	
パチンコ	2 (0.3%)	0 (0.0%)	2 (0.7%)	
トランシーバーなど	2 (0.3%)	0 (0.0%)	2 (0.7%)	
服・くつ	2 (0.3%)	2 (0.6%)	0 (0.0%)	
子ども用パソコン	1 (0.2%)	1 (0.3%)	0 (0.0%)	

**1%水準で有意,*5%水準で有意

に対し、女性は、リカちゃん人形やセーラームーン関係のグッズなどが欲しかったと答えており、好きだった遊びと重なっている。

しかし一方では少数ながら、「お菓子を作るおもちゃ」がほしかったと答えた男性や、「人形遊び」がしたかったという男性もいたし、「武器のおもちゃ」がほしかったという女性もみられる。おそらく女性と男性の遊びが分かれていく中であって、違和を感じる人は少なからずいるのであろう。その違和の質を検討するためには今しばらくデータの蓄積が必要と思われる。

4 「ランドセル」に関する思い

ランドセルの色は、ある意味で、「男女関係なく遊んでいた」子どもたちの世界にはっきりと出現する「分割ツール」のようなものである。ランドセルは我が国固有のものといわれているが、『舶来事物起源事典』によれば、ランドセルという言葉はオランダ語「ランセル」*rancel*が訛ったもので、もともとは背囊（はいのう）を意味する言葉であったが、1850年（嘉永3年）に高野長英が翻訳した『三兵答知古幾』に「担匣」（ラントスル）の語がみられ、衣服などを蓄えるものだったという（富田：379）。明治期には陸軍

において、「背囊」として使われていたが、大正天皇が学習院初等科に入学する時に、伊藤博文が通学用の背囊としてランドセルを献上したのが始まりだとされている^{ix}。

しかし実際にランドセルが一般に普及したのは、戦後復興期（1950年代半ば以降）であり、工場での大量生産が開始されたのは高度経済成長期（1960年代）であると考えられる。その中で皮革（牛革や豚革）、あるいは布で作られていたランドセルは、人工皮革・クラリーノに代わり、今日に至っているのである。

4.1 ランドセルの色

筆者が小学校に通っていた1960年代後半にはランドセルは黒と赤が主流であり他の色をみかけることはなかったが、このところは、大手スーパーイオンが各社と提携して発売している24色のランドセルにみられるように、ランドセルの色は急速にそのパリエーションを広げている。調査対象者らが小学校に入った頃がちょうどランドセルの色のパリエーションが広がりつつある頃だと思われるが、調査対象者のうち、赤のランドセルを持っていた女性は87.3%、黒のランドセルを持っていた男性は93.3%であり、女性では赤以外のランドセルを持っていた人は13

表 12 ランドセルの色

	計	女性	男性	
赤	277 (44.8%)	274 (87.3%)	0 (0.0%)	**
黒	281 (45.5%)	1 (0.3%)	277 (93.3%)	**
ピンク	26 (4.2%)	26 (8.3%)	0 (0.0%)	**
青	4 (0.6%)	0 (0.0%)	4 (1.3%)	**
紺	11 (1.8%)	0 (0.0%)	11 (3.7%)	**
茶色	2 (0.3%)	1 (0.3%)	1 (0.3%)	
ローズ	9 (1.5%)	9 (2.9%)	0 (0.0%)	
無回答	3 (0.5%)	1 (0.3%)	2 (0.7%)	
ない	2 (0.3%)	2 (0.6%)	0 (0.0%)	
その他	3 (0.5%)	0 (0.0%)	2 (0.7%)	
計 1	618 (100.0%)	314 (100.0%)	297 (100.0%)	

1 計には、性別について無回答者の回答も含む

**1%水準で有意, *5%水準で有意

%, また男性で黒以外のランドセルを持っていた人は6%と少数派であった(表12)。女性が持っている赤以外のランドセルではピンク(8.3%)やローズ・ワイン色(2.9%)などで、茶色も1人だけいた。他方、男性では紺(3.7%)や青(1.3%),

茶である。つまり、色のバリエーションは広がったものの、概ね女性では赤とピンクといった暖色系、男性では黒と紺、青といった寒色系が主流であり、赤と黒のランドセルがいわばオーソドックスな男女の分割ツールであったのに対し、

表 13 ランドセルについて感じたこと(項目別)

	計	女性	男性	無回答	記述(一部) F(女性) M(男性)
女子は赤, 男性は黒だった	74	42	32	0	女の子は赤, 男の子は黒と二極化していた(F)。全員男子は黒女子は赤だった(M)。
女子は赤, 男性は黒が当たり前と思った	35	26	9	0	男が黒, 女が赤が当然だった(F)。男子は黒で, 女子は赤でないとな変な感じがした(M)。
赤黒しか選択肢がなかった	12	5	7	0	今みたいに色々な種類のもが出ていない(F)。黒と赤しか売ってなかった(M)。
他の色のランドセルがかっこよかった・ほしかった	72	61	11	0	1コ下の女の子のランドセルの色が深緑色でかっこよかった(F)。青とか黒のランドセルがよかった(F)。低学年の頃は黄色がよかったと思った(M)。なんとなく青をうらやましく思った(M)。
他の色(赤黒以外)は変だと思った	33	23	10	0	赤と黒以外の人は変わってるなぁと思った(F)。ピンクとか緑のランドセルがあるのに違和感があった(M)。ピンクや茶色のランドセルを持っていた人が二人くらいいた。とてもめずらしく感じた(M)。
みんなと同じがよかった・ふつうがよかった	7	6	1	0	みんなと同じ色がよくて赤にしました。友達が1人だけピンクで目立っていた(F)。
みんなと違うのがよかった・ふつうはいや	13	11	2	0	1人だけ違う色でうれしかった(F)。紫が好きで, その色にしようと思ったのだがなくて, 黒も普通すぎて嫌だったので, 紺になった(M)。
ランドセルはもらった	2	2	0	0	おばあちゃんが赤のランドセルを買ってきたので色は自分できめていない(F)。
親の働きかけがあった	7	7	0	0	親に水色や青等は拒否され, 赤やピンクが嫌いだったから赤とピンクの中間にした(F)。赤は嫌だったからそのほかの色を選ぶことになったけど, オレンジがよかったのに親にピンクにさせられた。入学後は自分だけ浮いてる感じがした(F)。
きょうだいのランドセルについて	2	1	2	0	とても黒かった。ていうかおさがりだった(M)。赤色のランドセル(妹の)を自分が持ってあげているときは, はずかしかった(M)。妹のランドセルは水色(F)。
先生が決めた	1	1	0	0	先生が女の子はピンクで男の子は黒と勝手に決めた(F)。
からかわれた・言われた・めずらしがられた他	19	12	7	0	赤がよかったのでその意見を友達に言ったらからかわれた(M)。からかわれた, 青かった(M)。時々違う色のランドセルの子がいて, その子は不思議がられてた(F)。みんな赤だから赤のほうがいいんじゃないかと言われた(F)。
うらやましかった	18	17	1	0	ピンクのランドセルがうらやましかった(F)。友だちがピンクのランドセルやいろんな色のランドセルを使っていてうらやましかった(F)。なんとなく青をうらやましく思った(M)。
高学年では使わなかった	3	2	1	0	(色じゃないけど)5年生くらいからランドセルは使わなかった(M)高学年になるにつれて「ランドセルはかっこ悪い」的な風潮があらわれ, ランドセル派が著しく減ってさみしい思いをした(F)。
友だちに・友だちと	11	9	2	0	友だち3人でおそろいにした(F)。青がよかったけど, 女の子だし「なんで!」といわれるからと親に言われた。親友と同じ色にした(F)。赤がよかったのでその意見を友達に言ったらからかわれた(M)。

他の色も交えたところに新たな男女の分割線がひかれたような印象を受けた。なお筆者が行ったパイロット調査においても (iv 参照), 女性の赤のランドセルの所持率は90.9%, 男性の黒のランドセルの所持率は95.5%であり, 後者の方が高かった (女性のピンクのランドセルの所持率は5.5%)。

しかし次項でみるように, このオーソドックスな「赤と黒」という分割線があまりにも自然に子どもたちに受けとめられているので, ピンクのランドセルや青のランドセルでさえ「変な感じがした」という答がきかれることになる。

4.2 ランドセルの色について感じたこと

調査対象者にランドセルについて感じたことを自由記述で答えてもらったところ、「(実際に) 女子は赤, 男性は黒だった」ことについての記述をした人が74人(12.0%), 「女子は赤, 男子は黒が当たり前と思った」と書いた人が35人(5.7%)であった。また「赤と黒しか選択肢がなかった」と書いた人も12人(1.9%)みられた(表13)。

「(自分が持っていたのとは) 違った色のランドセルがかっこいいと思った・ほしいと思った」という記述をした人は72人(11.7%)みられ, 特に女性では61人(19.4%)が「(自分が持っていたのとは) 違った色のランドセルがかっこいいと思った・ほしいと思った」と答えている。

赤と黒以外のランドセルについて記述した人は167人(27.0%)であり, 特に「ピンク」のランドセルについて記述した女性が71人(22.6%)と多かった(表14)。そしてその内容は後に述べるように, 「ピンクにあこがれていた」「ピンクがほしかった」が圧倒的に多かった。

他方「赤と黒以外のランドセルを「変だと思った」人は33人(5.3%)であり, 自分が赤や黒以外のランドセルを持っていたために, からかわれたり, めずらしがられたりした人も少なくなかった。たとえばピンクのランドセルを持って

いた女性は「みんな赤だから赤のほうがいいんじゃないかと言われた」と書き, ワインレッドのランドセルをもっていた女性は「1年生の時はかなりランドセルが嫌いでした」と書いている。男性も同様で, 青いランドセルを持っていた人は「からかわれた, 青かった」という。

周囲のこのような反応が予想されるせいか, 赤以外のランドセルを買おうとして親にとめられたという女性の記述もみられる。彼女は「親に水色や青等は拒否され, (自分は) 赤やピンクが嫌いだったから赤とピンクの中間にした」と書いている。

これとは逆に「父は変わった色を買いたがっていたが, 普通に赤にした」という女性もいる。親から言われたからではなく, 自分でランドセルの色を「自粛」したという女性の記述もあった。「個人としては黄緑がよかったのですが, 女子=赤という印象(義務感)があった」ので赤のランドセルにしたというのである。「義務感」という表現は, 今回の調査の時点で高校生が用いたものであるが, ランドセル購入時の色の「決断」は6歳の子どものものであり, 幼児なりに, 上記に書いたような「決断」をしていることには驚かされる。

女性の9割近くの赤いランドセルの所有率と「絶対に赤じゃないと嫌だった」「何も迷わずに赤ってすぐ決まった」という女性の記述をみると, 「女の子は赤のランドセル」という信仰とでもいうべきものが存在しているように感じられる(表15)。

それを表すかのように, 黒のランドセルをもっていた女性は「ランドセルの色が他の女子とちがうので, とてもイヤだったし, からかわれた」と書いている。「黒は絶対いや」と書いた女性もいる。潜在的には「黒がよかった」という女性も6人ほどいるのに対し, 彼女たちが黒のランドセルを買うという決断をすることはなかったのである。

これらの状況をいかに読み解くことができるだろうか。「女子は赤, 男子は黒」というランド

セルの色は、あたかもジェンダーの「刻印」のように機能しており、男性の記号とでもいうべき「黒」のランドセルをもつ女性はその信仰に著しく抵触する存在なのであろうか。

他方、男性の黒のランドセルの所持率は93.3%と女性の赤のランドセルの所持率(87.3%)より高いことを考えると、男性の「黒」のランドセルへの信仰はもしかすると女性の「赤のランドセル」信仰よりも強いといえるのかもしれない。

男性でも「他の色の方が良かったけどみんな黒だから自分も仕方なくそれにした」、「男らしく目立ちすぎない色であるから黒に決めた」という記述がみられる。しかし実は「本当は赤が欲しかった」という男性もいるし、「赤がよかったのでその意見を友達に言ったらからかわれた」と書いた男性もいる。おそらく他者の目がなかったなら、あるいは「おかしい」という評価がなかったなら、子どもたちのもつランドセルの色はもう少し幅の広い選択肢になるのである

表 14 赤と黒以外のランドセルについての記述

赤と黒のランドセルについての記述		計	女性	男性	無回答	記述(一部) F(女性) M(男性)
		167	124	43	0	
下位区分	ピンク	79	71	8	0	ずっとピンクにあこがれていた(F)。どうしてもピンクがよくてねだった(F)。ピンクやオレンジをねだったけど買ってもらえなかった(F)。女 赤・ピンク 男 黒(M)。
	緑色	13	6	7	0	1コ下の女の子のランドセルの色が深緑色でかっこよかった(F)。緑がうらやましかった(M)。
	茶色	11	5	6	0	茶色のランドセルは僕ぐらいしかなかったので少し目立った(M)。友だちで茶色のランドセルを持っている子がいて 何でだろうと思った(F)。
	青・水色	11	7	4	0	親に水色や青等は拒否され 赤やピンクが嫌いだったから赤とピンクの中間にした(F)。なんとなく青をうらやましく思った(M)。
	黄色	9	3	6	0	緑とか黄色の子が印象的だった(F)。黄色か水色などの色のランドセルがあって驚いた(M)。
	ワイン・ローズ・紫	9	8	1	0	赤かピンクが迷って 両方入っているローズワインにした(F)。ローズピンクがうらやましかった(F)。
	紺	8	6	2	0	人とあまりかぶらない色だったので嬉しかった(F)。紫が好きで、その色にしようと思ったのだがなくて 黒も普通すぎて嫌だったので 紺になった(M)。
	赤黒以外の色	7	5	2	0	赤 黒以外の色は浮いていた(F)。赤・黒以外はクラスに1,2人でうらやましかった(F)。男の子は黒 女の子は赤。それ以外はおかしいと思っていた(F)。
	オレンジ	5	5	0	0	ピンクやオレンジをねだったけど買ってもらえなかった(F)。紺の子や 私の下の子達だとピンクやオレンジもいた(F)。
	黄緑	1	1	0	0	個人としては黄緑がよかったのですが、女子=赤という印象(義務感)があった(F)。
	金色	1	0	1	0	金色の人が居た(M)。
	豹がら・もよう	1	0	1	0	最近ひょう柄のランドセル見た(M)。
他の色について	12	7	5	0	自分が小学生だった頃は赤・黒だったけど、今では色々な色があってすごいと思う(F)。私が小学校の高学年になったころ いろんな色のランドセルが売られるようになった(F)。友達の中に面白い色のランドセルを持っている人がいたが、自分はシンプルに黒のほうが良かった(M)。	

う。しかし、実際は男性で赤のランドセルを持っていたという人は皆無であった。興味深いのは、次の男性の記述である。「(妹の)赤色のランドセルを自分が持ってあげているときは、はずかしかった」。自分ではなく、妹のランドセルでさえ、赤いランドセルを持つこと(あるいは持っていることをみられること)は恥ずかしいことと認識されているのである。ランドセルが刻印であるという指摘はあながちはずれたものではないだろう。

一方、赤と黒というランドセルのジェンダー分割とすこし距離がある調査対象者や、距離を

おくことに親近性を覚える調査対象者もいる。女性で多かったのは、先に述べたようにピンクのランドセルがほしかったという人たちである。「ピンクがほしかった」「ピンクがよかった」「ピンクとかかわいいと思っていた(原文のママ)」、「ピンクのランドセルがうらやましかった」「ピンクのランドセルにあこがれた」など、彼女たちのピンクのランドセルへの欲求は「あこがれ」や「かわいい」と表現されている。これに対し、寒色系のランドセルをもつ女の子を彼女たちが評価する時にみられた表現は「かっこいい」である(「1コ下の女の子のランドセルの色が深緑

表 15 赤と黒のランドセルについての記述

赤と黒のランドセルについての記述	計	女性	男性	無回答	F(女性) M(男性)
					記述(一部)
男子は(黒), 女子は(赤)	56	36	20	0	男の子は黒 女の子は赤ときまっていた(F). 女の子は赤で男の子は黒じゃないといけないものだと思っていました(F). 男は黒, 女は赤というイメージ(F). ピンクとかみるとえーって思った(F). 女の子は赤, 男の子は黒と二極化していた(F). 男は全員黒 女は赤とピンク(M). 全員男子は黒女子は赤だった(M). 男子は黒で, 女子は赤でないと変な感じがした(M). 女 赤-ピンク 男 黒(M).
男らしく黒	1	0	1		男らしく目立ちすぎない色であるから, 黒に決めた(M).
女だから赤	7	8	0	0	女の子なら赤だ(F). 決めるとき, 赤色のランドセルにしかなるつもりがなかった. みんなも赤色のランドセルだった(F). 絶対に赤じゃないと嫌だった(F). 何も迷わずに赤ってすぐ決まった(F). 個人としては黄緑がよかったのですが, 女子=赤という印象(義務感)があった(F).
黒!	18	7	11	0	黒がよかった(F, 6人). 黒は絶対いや(F). 黒でよかった(M, 2人). 黒しかなかった(M). 他の色の方が良かったけどみんな黒だから自分も仕方なくそれにした(M).
赤!	11	10	1	0	普通の赤でしか(F). ほとんどの女子が赤だった(F). みんなと同じ赤が嫌で(そもそも赤が嫌いで)絶対赤いランドセルにはしたくなかった(F). みんなと同じ色がよくて赤にしました. 友達が1人だけピンクで目立っていた(F). 本当は赤が欲しかった(M).
黒でいやな思いを	3	1	2		ランドセルの色が他の女子とちがうので, とてもイヤだったしからかわれた(黒, F).
赤	6	6	0		みんなと同じ色がよくて赤にしました. 友達が1人だけピンクで目立っていた(F). 父は変わった色を買いたがっていたが, 普通に赤にした(F). みんなと同じ赤が嫌で(そもそも赤が嫌いで)絶対赤いランドセルにはしたくなかった(紺, F).

色でかっこよかった」、「女の子で紺色の子がいて、かっこいいと思った」。調査対象者である女性たちが使う「かわいい」と「かっこいい」という表現はおそらく何らかの質的差異を含む評価の言葉であると考えられる。これは彼女たちのジェンダー意識とどのように結びついているのであろうか。この考察には今しばらく時間をかける必要があると思うが、いわゆる「女性職」を「ピンクカラー」と呼ぶように、ピンクは女性らしさの象徴とされている色であり、ある意味では赤よりも女性らしい色である。ピンクのランドセルを持つことの象徴的な意味あいについてはより慎重な分析が必要だろう。ただ「男

は黒、女は赤」というランドセルの分割の指摘に交じて、「男は全員黒 女は赤とピンク」という表現もみられるようになっており、あたかも新しいジェンダー分割のような様相を呈している。

そのほか、黒以外のランドセルを持っていた男性たちのコメントとしては、「紫が好きで、その色にしようと思ったのだがなくて、黒も普通すぎて嫌だったので、紺になった」、「茶色のランドセルは僕ぐらいしかいなかったので少し目立った」というものがあった。自身が好きな色もさることながら、他者（友人、級友）の視線を子ども達は十分に意識しているのである（表 16）

表 16 人と違ったランドセルの色についての記述

ランドセルについての記述	計	女性	男性	無回答	F(女性) M(男性)
					記述(一部)
違う色・人と違う色	13	8	5	0	他の色の方が良かったけどみんな黒だから自分も仕方なくそれにした(M)。本当はもっと目立つ色がよかった(M)。みんなと同じ色がイヤで、ピンクにしたかった(F)。みんなと違う色で、最初の頃は少し違和感があった(F)。
女子でも...	9	7	2	0	女子でも黒のランドセルを使ってる人もいた(M)女の子で紺色の子がいて、かっこいいと思った(F)ほかの小学校で女の子なのに黒いランドセルで変なのーと思ったことがある(F)。
男子でも...	2	1	1	0	男でも茶色や緑の人がいた(M)。1人女の子友達がピンクを持って、男の子友達が黄色持ってる子がいて最初は欲しかった(F)。
区別を感じた	1	1	0	0	女の子は赤、男の子は黒となって区別され、幼稚園の頃は性別による区別を感じなかったが、ランドセルを持つようになって区別を感じるようになった(F)。
選択について	2	1	0	1	女の子は「赤」でしかも赤の種類も一色しかなくてえらべなかった(F)。自分の希望で決めた

5 「男らしく」「女らしく」という働きかけ

ランドセルの色の決定にあたって、「親に水色や青等は拒否された」という女性や、むしろこれとは逆に「父は変わった色を買いたがっていたが、普通に赤にした」という回答がみられたが、幼児期のジェンダー意識の形成にあたって、親や周囲からの働きかけは大きな意味をもつ。

調査では、「あなたは、保育士や教員、親から、『男らしく(男だから)...』『女らしく(女だから)...』といわれたことがありますか?」という形で、幼年期のジェンダーの社会化にとって重要なアクターである、保育士・幼稚園教諭、小学校教諭、そして 家族(親や祖父母)からの言葉がけについてきている。

5.1 「男らしく」「女らしく」はどれくらい言われているか

保育士・幼稚園教諭、小学校教諭、家族(親

や祖父母)のうちで、もっとも子どもへのジェンダーの社会化の働きかけが強かったのは、親や祖父母など家族からのものであり、調査対象者の59%が家族から「男らしく」「女らしく」と言われたと答えている(表17)。この傾向は特に女性で顕著に高く、「女らしく」と言われた人は81%にも達する。これに対し、「男らしく」と言われたことがある男性は37%で、その差は44ポイントであった。また女性の場合は、小学校教諭からの言葉のかけが多く(37%)、次いで保育士・幼稚園教諭から(22%)となっていたのに対し、男性の場合は、保育士・幼稚園教諭からが多く(27%)、小学校教諭(21%)はこれに比べやや低くなっていた。

5.2 「男らしく」「女らしく」はどのような時に言われているか
次に言われた内容をみていくことにしよう。

「男らしく」「女らしく」と言われたことがある人が、どのようなことについて注意されたかをみていくと、家族からの場合、女性では、多い順に言葉づかい(75%)、行儀作法・身だしなみ(67%)、お手伝い(48%)、整理整頓(41%)、帰宅時間(26%)、服装(20%)についてであった(表18)。他方、男性の場合、もっとも多かったのは泣くのはやめなさいという注意(43%)で、次いで、行儀作法・身だしなみ(38%)、お手伝い(19%)、整理整頓(18%)、言葉づかい(17%)、勉強(17%)となっていた。これらのうち、有意な男女差がみられたものは、言葉づかい(差は58ポイント)、泣くのはやめなさいという注意(差は39ポイント)、行儀作法・身だしなみ(差は29ポイント)、手伝い(差は29ポイント)、整理整頓(差は23ポイント)、帰宅時間(差は17ポイント)、服装(差は9ポイント)であるが、泣くの

表 17 「男らしく」「女らしく」と言われたことがある

	計	女性	男性
親・祖父母から	367 (59.4%)	254 (80.9%)	109 (36.7%)
小学校教諭から	181 (29.3%)	116 (36.9%)	63 (21.2%)
保育士・幼稚園教諭から	150 (24.3%)	68 (21.7%)	81 (27.3%)

表 18 どんな時に言われたか(親・祖父母から)

	計	女性	男性	
言葉づかいについて言われた	211 (57.5%)	191 (75.2%)	18 (16.5%)	**
行儀作法,身だしなみ	212 (57.8%)	169 (66.5%)	41 (37.6%)	**
遊び方	47 (12.8%)	31 (12.2%)	15 (13.8%)	
お手伝い	144 (39.2%)	122 (48.0%)	21 (19.3%)	**
服装	65 (17.7%)	52 (20.5%)	12 (11.0%)	*
整理整頓	127 (34.6%)	105 (41.3%)	20 (18.3%)	**
泣くのはやめなさいという注意	53 (14.4%)	4 (1.6%)	47 (43.1%)	**
勉強	49 (13.4%)	29 (11.4%)	18 (16.5%)	
帰宅時間	77 (21.0%)	65 (25.6%)	10 (9.2%)	**
その他	17 (4.6%)	3 (1.2%)	13 (11.9%)	**

**1%水準で有意, *5%水準で有意

はやめなさいという注意を除くすべての項目で、女性の方が多く声がけをされていた。

次に、小学校教諭から言われた内容を見ると、女性では、言葉づかい(73%)、行儀作法・身だしなみ(52%)、整理整頓(23%)、お手伝い(17%)の順に多く、男性の場合は、行儀作法・身だしなみ(32%)、勉強(27%)、言葉づかい(25%)、泣くのはやめなさいという注意(21%)の順に多かった(表19)。これらのうち、有意な男女差がみられたものは、言葉づかい(差は48ポイント)、勉強(差は19ポイント)、泣くのはやめなさいという注意(差は18ポイント)、行儀作法・身だしなみ(差は20ポイント)であり、勉強と泣くのはやめなさいという注意は男性の方が、他の項目ではすべて女

性の方が多く言われていた。

保育士・幼稚園教諭から言われた言葉でもほぼ同じ傾向がみられ、女性では、行儀作法・身だしなみ(66%)、言葉づかい(65%)、お手伝い(38%)、整理整頓(34%)の順に、男性では、泣くのはやめなさいという注意(69%)、行儀作法・身だしなみ(23%)の順に多かった(表20)。遊び方を除くすべての項目で、有意な男女差がみられ、その差は大きい順に泣くのはやめなさいという注意(差は68ポイント)、言葉づかい(差は53ポイント)、行儀作法・身だしなみ(差は43ポイント)、お手伝い(差は29ポイント)、整理整頓(差は28ポイント)となっていた。泣くのはやめなさいという注意は男性が、他のすべての項目は女性の方が多く言

表 19 どんな時に言われたか(小学校教諭から)

	計	女性	男性	
言葉づかいについて言われた	103 (56.9%)	85 (73.3%)	16 (25.4%)	**
行儀作法, 身だしなみ	81 (44.8%)	60 (51.7%)	20 (31.7%)	*
遊び方	28 (15.5%)	16 (13.8%)	12 (19.0%)	
お手伝い	29 (16.0%)	20 (17.2%)	8 (12.7%)	
服装	24 (13.3%)	19 (16.4%)	5 (7.9%)	
整理整頓	37 (20.4%)	27 (23.3%)	9 (14.3%)	
泣くのはやめなさいという注意	16 (8.8%)	3 (2.6%)	13 (20.6%)	**
勉強	27 (14.9%)	9 (7.8%)	17 (27.0%)	**
帰宅時間	15 (8.3%)	11 (9.5%)	4 (6.3%)	
その他	10 (5.5%)	5 (4.3%)	5 (7.9%)	

**1% 水準で有意, *5% 水準で有意

表 20 どんな時に言われたか(保育士・幼稚園教諭から)

	計	女性	男性	
言葉づかいについて言われた	55 (36.7%)	44 (64.7%)	10 (12.3%)	**
行儀作法, 身だしなみ	65 (43.3%)	45 (66.2%)	19 (23.5%)	**
遊び方	26 (17.3%)	12 (17.6%)	14 (17.3%)	
お手伝い	34 (22.7%)	26 (38.2%)	7 (8.6%)	**
服装	16 (10.7%)	12 (17.6%)	4 (4.9%)	*
整理整頓	29 (19.3%)	23 (33.8%)	5 (6.2%)	**
泣くのはやめなさいという注意	57 (38.0%)	1 (1.5%)	56 (69.1%)	**
その他	5 (3.3%)	1 (1.5%)	4 (4.9%)	

**1% 水準で有意, *5% 水準で有意

われていた。なお、保育園に通っていた子どもと幼稚園に通っていた子どもの差はみられなかった。

家族(親や祖父母)、保育士・幼稚園教諭、小学校教諭の三者からの言葉がけについてまとめると、一般的に「女らしく」の方が「男らしく」より多く口にされており、また言われている内容も「女らしく」の方が多岐に渡っていた。つまり、「女らしく」は、家族(81%)>小学校教諭(37%)>保育士・幼稚園教諭(22%)の順に多く、特に言葉づかいや行儀作法・身だしなみについて指摘されていることが多かった。言葉づかいについては、家族(75%)>小学校教諭(73%)>保育士・幼稚園教諭(66%)の順に、また行儀作法・身だしなみについては、家族(67%)>保育士・幼稚園教諭(66%)>小学校教諭(52%)の順に多くなっており、およそ5割から7割ほどの女性が「女らしく」と言われたことがあるということになる。またお手伝い、整理整頓についても女性の方が多く言われており、お手伝いについては家族(48%)>保育士・幼稚園教諭(38%)>小学校教諭(17%)の順に、整理整頓については家族(41%)>保育士・幼稚園教諭(34%)>小学校教諭(23%)の順に多くなっていった。他方、「男らしく」は、家族(37%)>保育士・幼稚園教諭(27%)>小学校教諭(21%)の順に多く言われているが、女性に比べると言われた経験をもつ人の比率は低く、かつ言われた内容は女性ほど多岐に渡っていなかった。男性に特徴的なのは、「男の子なんだから泣くのはやめなさい」という注意が多いことであり(保育士・幼稚園教諭(69%)>家族(43%)>小学校教諭(21%))、勉強について「男の子なんだから」と言われた経験を持つ人が女性に比べ多いことである。女性との差は、小学校教諭からで19ポイント、家族からでは6ポイントであった。以前も指摘したことがあるが(笹原2003)、学校で男子に対する声かけが多いのは、「男だから...」が、「がんばれ」という叱咤激励の言葉として発せられることが多いからで

ある(後述)。一方、男性に対する、言葉づかいや行儀作法・身だしなみについての注意は、女性に向けられているものと比べると少なく、言葉遣いについての女性との差は、家族(58ポイント)>保育士・幼稚園教諭(53ポイント)>小学校教諭(48ポイント)となっている。同様に、行儀作法・身だしなみについての女性との差は、保育士・幼稚園教諭(43ポイント)>小学校教諭(30ポイント)>家族(29ポイント)であり、女性に比べ著しく少ないことがわかる。つまり、男性は、泣くことと勉強については性を引き合いに出した注意を多く受けているわけであるが、言葉づかいや行儀作法・身だしなみなどについての働きかけは、女性に比べると相対的にだいぶ少なくなっているのである。

これらの調査結果は、かつて筆者が行った調査の所見と一致する(笹原1999:186-197)。すなわち1994年に行った新潟調査では、「女らしく(女だから)...しなさい」「男らしく(男だから)...しなさい」といわれた経験をもつ児童生徒は、女性(77%)>男性(55%)と女性に多く、女性に対する声かけは、言葉遣いから手伝い、整理整頓、礼儀作法にいたるまでなされていたのに対し、男性に対しては勉強や進路、手伝い、言葉遣い、泣いたときなどに口にされていたことが明らかになっているのであるが、今回の調査にも同様の傾向がみられるのである。

「男だから泣くのをやめなさい」という声かけの多さは、泣くという行為を抑制することが自らの性の自覚とあわせて教えられていることを意味する。伊藤公雄は、男らしさには優越志向、所有志向、権力志向が含まれると分析しているが(伊藤1996:104)、要するに、男性はそのため、強く(弱くなく)・たくましいこと(タフであること)を要求される。「男の子なんだから泣くのはやめなさい」という注意は、保育園・幼稚園で多いが、それは初めての集団生活の中で他の子どもとの軋轢や摩擦が起きやすい年齢の子どもたちがよく泣くからであろう。保育園・幼稚園とは子どもたちが家庭を出て初めて他人と

濃密なコミュニケーションをとる場所である。そこにおいて「泣くのはやめなさい」という働きかけが男性に対して強く働いているというのは実に象徴的である。そして学齢期になると、男性たちは、学校においても家庭においても、自らの性別を引き合いにだされながら勉強をするようにと言われるようになる。筆者がかつて指摘したように、学校において男性に対する声かけが多いのは、「男だから…」が、「がんばれ」という叱咤激励の言葉として発せられることが多いからであり、これらが生徒を鼓舞するために使われることと関連がある(笹原2003:93)。というのもこれらの言葉は勉学を推奨し生徒の向上をはかるという意味で学校においては正当化されやすく、また「男子」(のみ)に対する鼓舞が男女への違った扱いであることを教員ならびに学校関係者が自覚しにくいからである。

5.3 言われてどのように感じたか

「男らしく」「女らしく」と言われた対象者は、それをどのように感じたのだろうか。「教師や親から『男らしく』『女らしく』といわれたときにどんなふうに感じましたか?おぼえていることがあれば教えて下さい」という形できいてみた。自由記述であったので、実に様々な記述がみられたが、注意されてその通りだと思ったか、反発を覚えたのかななどをアフター・コーディングを施し分類を試みた(表21)。

全体的にみると、「(注意されても)関係ない

と思った」(15.4%)、「不快だった(嫌だった)」(15.4%)、「(注意された内容について)疑問に思った」(14.5%)、「(注意された内容を)その通りだと思った」(13.4%)、「特にない(特に感じることはなかった)」(12.3%)などとなり、この分類に収まらない記述をした人も20.1%いた。

女性と男性を比べると、女性では「反発を感じた」(10.4%)や「疑問に思った」(18.9%)、「関係ないと思った」(19.4%)が多く、これらを合わせると約半数を占めた。また「不快に思った」(15.4%)も多く、これをあわせると66%にも達する。他方、男性では、「特にない(特に感じることはなかった)」が23.4%と最も多く、次いで「その通りだと思った」(15.9%)、「不快に思った」(11.7%)が続いている。女性では「反発を感じた」「疑問に思った」「関係ないと思った」「不快に思った」など、注意されたことに対して、抵抗感をもった人が66%であったが、男性の場合は32.4%と約半数となっていた。一方、「その通りだと思った」「特にない(特に感じなかった)」を合わせた比率は、男性では39.3%であったのに対し、女性では16.4%と少ない。つまり、男性の方が「男らしく」と言われたことに従順であり、女性の方が「女らしく」と言われたことに対して抵抗をおぼえているということになる。

筆者はかつて拙稿「ジェンダーの『社会化』」において、「女らしく」と言われることへの抵抗、

表21 「男らしく」「女らしく」に対してどのように思ったか

	計	女性	男性	
その通りだと思った	47 (13.4%)	24 (11.9%)	23 (15.9%)	
反発を感じた	24 (6.8%)	21 (10.4%)	3 (2.1%)	**
特にない	43 (12.3%)	9 (4.5%)	34 (23.4%)	**
関係ないと思った	54 (15.4%)	39 (19.4%)	14 (9.7%)	*
疑問に思った	51 (14.5%)	38 (18.9%)	13 (9.0%)	*
異性の方がいいと思った	5 (1.4%)	4 (2.0%)	1 (0.7%)	
不快(嫌)だった	54 (15.4%)	35 (17.4%)	17 (11.7%)	
その他	73 (20.8%)	31 (15.4%)	40 (27.6%)	**

**1%水準で有意,*5%水準で有意

また女性の抱える葛藤について次のような論述をしたが、それをそのまま今回の分析として示しておくことにしたい。

「女子の場合は、『女らしい』言葉づかいや礼儀作法などの立ち居振る舞いを要求されたり、女性は『おとなしく』(一歩下がって)という形で行動を規制されるために、自負心を抑えられることへの『抵抗』が生じ、特に小学生の頃は『男の子たち』に対し、『女の子の方が』という形で張り合うことに象徴される抵抗がみられる。しかし一方では家事の手伝いなど家族を補助する役割に誇りを持ったり、周囲への配慮を女性独特の能力としてとらえたりして、女性であることに誇りを持つ側面もある。だから整理整頓、手伝いといった家事と直結することを要求されることへの抵抗を示しながらも、周りからの評価に占める『女らしさ』のウエイトの大きさが彼女たちに葛藤を生じさせる」(笹原1999:198-199)

それゆえ、女性たちは、「女らしさ」を強調する教育に抵抗を覚えるものの、女性が仕事の責任と並んで家事責任を引き受ける、いわゆる「新・性別役割分業観」に親近感を持つのである。

6 おわりに - 結語 -

本稿では、高校生調査の分析を通して、幼年期のジェンダーの社会化過程を分析してきた。幼年期に好きだった遊び(保育園・幼稚園時、小学生)については、「ごっこ遊び」や「砂遊び」「遊具遊び」など男女に共通するものも少なくないものの、「ごっこ遊び」の中でも女性では「ままごと」など家事に親近性の高い遊びや、「セーラームーンごっこ」などメディアの影響がみられるものなどがあった。他方、男性では幼児期においても「積み木・ブロック遊び」などと並んで、「サッカー」が好きだという人が10.4%みられ、それは小学校に入ると、23.2%に急増していた。自分の性別と遊びについて感じたことについての記述では、幼児期では、サッカーやま

まごとに男女共に興ずる姿がみられたが、それを「外」から見つめる女の子の姿もみられた。また特に女性で「女の子の遊びは好きではない」という形での嫌悪が生じていることがわかった。ほしかったおもちゃややりたかった遊びについての分析においてもほぼ同じ傾向がみられ、女性も男性もそれぞれの好きだった遊びに関連するおもちゃをほしかったと答える傾向がみられた。

小学校入学時のランドセルについては、男女とも「男は黒、女は赤」というランドセルについての観念が存在していたことが明らかになったとともに、それは他の色のランドセルへの違和感を伴った形の神話性をもっていることが明らかになった。

家族(親や祖父母)、保育士・幼稚園教諭、小学校教諭からの「女らしく」「男らしく」という言葉がけは、男性よりも多く女性に向けられており、かつ質的にも違ったものであった。すなわち女性に向けては家族(81%)、小学校教諭(37%)、保育士・幼稚園教諭(22%)の順に多く、言葉づかいや行儀作法・身だしなみ、お手伝い、整理整頓など全般的に言われていたのに対し、男性に向けては家族(37%)、保育士・幼稚園教諭(27%)、小学校教諭(21%)となっており、「泣くのをやめなさい」や「勉強」についての声かけが多かった。このような声かけに対する反応も男性では「特にない」や「その通りだと思った」という反応が多かったが、女性では反発したり不快だと感じたりすることが多かった。

このように、高校生たちの実感や眼差しは、男女で質的に異なっていた。そしてこの質的な差異の背後には、これまでのナイーブな「社会化」概念の限界を解く鍵が隠されているように思われる。すなわち、冒頭に掲げた、ボーヴォワールのいうところの「人は女に生まれるのではない、女になる」という側面、「文明全体が、男と去勢者の中間物、つまり女と呼ばれるものを作りあげる」という側面がある一方で、<女にならせようとする>働きかけや<男にならせよう

とする>働きかけに対して、反発したり抵抗したり、あるいはすり抜けたらといった戦略をとりながら自己を形成している姿がみられるのである。この点の分析について本稿ではまだ不十分であり、今後の課題とするが、本稿では単純ではないジェンダーの社会化の内実の一端を描き出すことができたと思う。

参考文献

- 1) シモーヌ・ド・ボヴォワール著『第二の性を』を原文で読み直す会訳『決定版 第二の性(事実と神話, 体験上巻, 下巻,) (文庫版), 1949年(翻訳は2001年), 新潮社。
- 2) シモーヌ・ド・ボヴォワール著, 生島遼一訳『第二の性』(新潮文庫, 全5巻) 1949年(翻訳は1959年), 新潮社。
- 3) ジョーン・W. スコット著, 荻野 美穂訳『ジェンダーの歴史学』, 1992年(翻訳), 平凡社。
- 4) 井上 輝子, 江原由美子, 加納実紀代, 上野千鶴子, 大沢真理 編集『岩波女性学辞典』2002年, 岩波書店。
- 5) 竹村和子「ジェンダー」『岩波女性学辞典』(前掲), pp.163-165
- 6) リサ・タトル著, 渡辺 和子訳『フェミニズム辞典』, 1991年, 明石書店。
- 7) 森繁男「性役割の学習としつけ行為」, 柴野昌山編『しつけの社会学』, 世界思想社, 1989年。
- 8) 森繁男「学校における性役割研究と解釈的アプローチ」『京都大学教育学部紀要』31号, 1985年。
- 9) 宮崎あゆみ「学校における『性役割の社会化』再考 - 教師による性別カテゴリーの使用を手がかりとして」『教育社会学研究』第48集, 1991年。
- 10) 木村育恵「小学校におけるジェンダー形成に関する研究 - 函館市立公立小学校での調査から - 』北海道教育大学函館学校教育学会誌』 第7号, 2002年。
- 11) 木村育恵「教師 - 児童間の相互作用におけるジェンダー形成 - 児童調査の性別・学年別分析 - 」『学校教育学研究論集』, 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科, 2004年。
- 12) 笹原恵「ジェンダーの社会化～『適応』と『葛藤』のはざまから～」『講座社会学 14 ジェンダー』, 1999年, 東京大学出版会。
- 13) 新潟市女性行動計画推進会議『新潟市の小中学校における児童生徒と教員の男女平等にかかわる意識と実態』, 1995年。
- 14) 笹原恵「男の子はいつも優先されている? 学校の『かくれたカリキュラム』」, 天野正子, 木村涼子編著『ジェンダーで学ぶ教育』, 世界思想社, 2003年。
- 15) 木村涼子「女性キャラはなぜ一人? アニメやマンガにおけるジェンダー」天野・木村編著, 前掲書。
- 16) マイラ・サドカー&デイビット・サドカー 著訳『「女の子」は学校でつくられる』時事通信社, 1996年。
- 17) 平成17年度静岡県男女共同参画センター委託研究事業報告書『男女平等のキャリアデザインをめざす保育・教育のあり方に関する研究 - 男女平等保育をめざして - 』(静岡大学情報学部 笹原研究室 笹原恵研究代表), 2006年。
- 18) 富田 仁『舶来事物起原事典舶来事物起源事典』, 名著普及会, 1987年。
- 19) 伊藤公雄『男性学入門』作品社, 1996年。

註

- i 本稿においては、幼児期を就学前までの時期として、また幼年期を小学校の低学年ぐらいまでを含むやや広い概念として用いている。
- ii むろん今日であってはメディアもまたこの「介在」のうえで重要な役割を果たして

いることは言うまでもない。本稿で用いた調査においてはメディアについての設問は直接は含んでいないが、後に述べるように、メディアの影響は、子どもたちの遊びやおもちゃなどにも色濃くみられる。

- iii 調査では、前述のように、高校生らが、幼児期から現在に至るまで、どのようなジェンダー意識をもってきたのかを知るために、「なりたかった職業」の変遷をきいている。「職業」に着眼したのは、むしろ職業が、私たちがこの社会のどこに位置づけられているかを顕著に表すものであるからにほかならない。しかしある職業に就くことに含意されたジェンダーの意味を探るには、すでにブルデューが試みたところの「ディスタクシオン」的分析が必要になるというのが現在の私の認識である。分析するための理論的枠組みの検討が現在では著しく不十分であるため、職業の変遷の分析は別稿を期したい。

- iv 今回の調査に先立ち、2006年3月には静岡県内の普通高校1年生3クラスにおいてパイロット調査を試みている。パイロット調査では1校、121人の高校生に協力してもらったが、今回は静岡県全体から無作為に高校を抽出し、統計的に有意なデータ収集を試みた。

なおパイロット調査および幼児期のジェンダーの社会化研究にあたっては、2005年度(平成17年度)の、静岡県男女共同参画センター委託研究事業の助成をいただいた。3月調査の結果は、平成17年度静岡県男女共同参画センター委託研究事業報告書『男女平等のキャリアデザインをめざす保育・教育のあり方に関する研究 - 男女平等保育をめざして - (静岡大学情報学部 笹原研究室 笹原恵研究代表)』として刊行済である。

- v 2007年は皇室に男子が誕生した年であり、一連の騒動を通じて、マスコミをはじめと

する男子優越主義が浮き彫りになったことは記憶に新しい。40数年ぶりに生まれた男性皇族は、「悠仁」親王と名付けられたが、この「悠」の字を使った名前が、男の子の名前ベスト10に3つも入っている。

- vi 筆者の行った保育園調査(観察,2005-2006年)によると、「お母さんごっこ」にはお父さんが登場しないことも多く、その代わりというわけではないだろうが、「ペット」役を演ずる子どもが時折、観察された。

- vii セーラームーンチャンネル
<http://sailormoon.channel.or.jp/>
 セーラームーンは、武内直子原作のマンガであり、1991年7月に講談社の雑誌『るんるん』夏休み号の読み切り短編『コードネームはセーラーV(ブイ)』として掲載されたものが原案で、同年12月、同じ講談社の雑誌『なかよし』2月号から『美少女戦士セーラームーン』として連載が開始されている。翌1992年3月には早くもテレビ朝日系で放映されており、1993年3月に第2期シリーズ『美少女戦士セーラームーンR』が、1994年3月には第3期シリーズが開始され、1996年の第5期まで放映されている。このアニメは海外(スペイン,フランス)でも配信され、またアニメの映画化や、ミュージカル化、実写版ドラマの制作がなされるなど一世を風靡したといえるだろう。

- viii 自身の性の受容度が低いことについては、拙稿(笹原1999)でも触れているが、1994年の新潟調査では、自分が女(男)でよかったと答えているのは女性では5割、男性では7割であった。一方、否定的にとらえているのは(女・男でない方がよかった)、女性では15%、男性では2%であった。同様の傾向が、各種の調査においてもみられる。

- ix 誰が献上したのかは諸説があり、学習院の第四代目の院長、三浦梧楼中將であるという説もあれば、現在のランドセルの形を考案したのは、当時の学習院院長であった乃

木希典であったという説もあるという（富田『舶来事物起源事典』ランドセルの項 p.379 より）。

- x ランドセル専門店キッズ・スクエアを営む風間厚得氏は、ランドセル博物館を web 上で開設しており、氏が収集したランドセルの歴史に関する資料やランドセルの写真を

公開している。氏によれば、すでに大正期には東京などの大都市圏の大手デパートでランドセルが販売されていたという。また布製ランドセルも 1927 年（昭和 2 年）から製造されているという（キッズ・スクエアランドセル博物館 <http://www.e-randoseru.com/>）